

自国史の再編

カンプチア人民共和国体制下における カンボジア史叙述の検討を通して¹

新谷春乃

1. はじめに

自国史はその国家のアイデンティティの核であり、その叙述を通して国民統合や国家の正統性が主張される。特に、ある体制から別の体制へと急激に転換した場合、歴史は喫緊かつ重要な問題となる (Evans 2003: 5)。本稿で検討するカンボジアは、1953 年の独立以降、内戦 (1970～75 年)、民主カンプチア体制 (以下、ポル・ポト体制) 下のジェノサイド (1975～79 年)、そして再び内戦 (1979～91 年) と混乱を極め、幾度に渡る体制転換を経験してきた。それらの体制転換は前体制を否定する形の急激な転換であったため、独立以降のカンボジアの歴史は、自国史を見直し続けた歴史ということもできよう。

本稿が射程とするカンプチア人民共和国体制期のカンボジアでは、ポル・ポト体制下で荒廃した国土の復興と内戦による国家分断の危機への対処が課題となった。また同体制は、1979 年 1 月 7 日にポル・ポト体制を打倒した後、ベトナムやソ連をはじめとする東側諸国からの支援を得て、国家再建に取り組んだ社会主義体制であった。ポル・ポト派はカンボジア西北部へ敗走し、そこを拠点として内戦を展開した。1982 年にシハヌーク派、ソン・サン派といった過去にカンボジアを統治した諸勢力がポル・ポト派と三派連合を結成した。三派連合側はアメリカやタイなどの西側諸国と中国からの支援を得て、国連でカンボジア代表の議席を確保し、カンプチア人民共和国と内戦を継続した。国土の再建と内戦という課題を抱え、カンプチア人民共和国は国民としての一体感を強化し、国家としての正当性を国内外へ発信しなければならなかった。三派連合側のシハヌークとカンプチア人民共和国側のフン・センが和平に向けて会談を行った 1987 年以降、カンボジアを取り巻く国際環境は劇的に変化していくが、本稿はその変化が起こる以前のカンボジアを舞台とする。国家再建上、多くの課題を背負ったカンプチア人民共和国体制下における自国史再編の試みは、歴史叙述に関わる多様な側面を浮き上がらせる。

カンボジアの自国史は、アンコール時代の栄光とその後の衰退という歴史観で構成され、カンボジアの公定ナショナリズムの核に据えられてきた。このように栄光の歴史と衰退の歴史を公定ナショナリズムの核に据えることはカンボジアに限らず、様々な国家で採用される。カンボジアでは、フランス植民地期に上述の栄光と衰退の歴史観の枠組みが構築されて以来、その枠組みを基礎とした歴史認識が独立後の各体制に継承されてきたと言われる。それは、カンボジア人をインドシナ半島最古の民族と位置づけ、アンコール時代に繁栄を築いたという民族の栄光に依拠する歴史観と、アンコール時代以降に隣国のシャムやベトナムから侵略され衰退し、常に消滅の恐怖に脅かされているという被害者としての歴史観から構成される (Barnet 1990, Edwards 1996, 2007, 北川 2006)。このような歴史観は、カンボジアを衰退の淵から救ったというフランスの植民地支配を正当化することに寄与した。

カンボジアでは、独立運動の際にフランス植民地支配に強硬に抵抗した勢力が独立後の主たる政治勢力となり得なかった。そのため、反植民地抵抗運動を担った勢力が独立後の政権を担った国家とは異なり、独立後に植民地史観の大幅な書き換えは行われなかった²。この歴史観の継承は独立直後の政権に留まらず、独立以降度々体制が転換する中でも各体制の為政者の公定ナショナリズムに内包されてきたと指摘される (Barnet 1990, Edwards 1996, 笹川 2006)。

カンボジア人民共和国体制をめぐる研究は、現カンボジア人民党体制の基礎構築期と位置づける政治体制研究 (天川 2001, 山田 2011) や、カンボジア人民共和国体制を包括的に論じた研究 (Slocomb 2003, Gottesman 2004) など、2000年代以降に研究が蓄積されつつある。その一方で、同体制の政治思想に関する研究は、独立後の他の政治指導者と同様に栄光と衰退で構成された歴史観を踏襲したという指摘に留まり、その時代の公定ナショナリズムが抱えた諸条件や自国史編纂の課題を十分に検討していない。ベトナムの監督下における歴史編纂という観点から人民革命党の党史を研究したフリングズは、党史の中で、同じく社会主義を標榜したポル・ポト体制とカンボジア人民共和国が目指す社会主義が異なる性格であると指摘した。また、カンボジアの国家再建において強い影響力を持ったベトナムの歴史観を受容しつつも、人民革命党はベトナムと対等な関係であることも歴史観に込めたと指摘した (Frings 1997)³。ベトナムの干渉を一方的に受け入れなかったという見方は、ベトナムの影響を取捨選択の上で受け入れたという教育言語政策研究においても指摘されている (Clayton 2000)。これらの研究を踏まえ、本稿では、荒廃した国土の誇りの復活、過去のトラウマ的出来事に対する記憶の問題、内戦下

での国民統合、マルクス主義的人民史観への転換、隣国ベトナムの影響という課題に着目し、カンボジアの自国史再編の試みを検討する。検討をするにあたり、当時の教科書や指導要領、宣伝文化省発行の報告書、指導者の発言録といった文献資料と、当時の関係者へのインタビュー資料を用いる。

2. ポル・ポト時代の歴史化と被害の歴史意識の再構築

2.1. ポル・ポト体制崩壊直後の歴史教科書

1979年1月のポル・ポト体制崩壊直後より、カンブチア人民共和国政府は教育の再建に着手した。1980年代初頭に中等教育用の学習指導要領『第2課程と第3課程のための学習指導要領』と初等教育用の学習指導要領『初等教育のための公教育要領』が発行された。中等教育と初等教育の指導要領の内容共に同様の傾向が見られたことから、ここでは初等教育における歴史教育の目的を見る。

1. 生徒は重要な出来事と人民史における模範的英雄について学ぶ。労働者の役割、英雄、国と革命を愛する運動の素晴らしい導師について生徒に説明する。生徒はカンボジア史に関する初歩的な見方を獲得する。
2. 生徒は勇敢な闘争意識と人民の良い労働意識という良き伝統を獲得する。教育を通して、生徒に祖国を深く愛させ、民族独立、自由と人民の幸福の敵となる者を嫌悪させる。教育によって、生徒は純粋な国際無産階級意識、ベトナム、カンボジア、ラオスの三国の人民に共通する敵と闘争する団結意識を獲得する。指導的党を堅く信じ、深く愛し、恩恵に感謝し、あらゆる革命の英雄を模範とし、祖国と人民へ利益をもたらす行動を生徒にとらせる。(教育省 1981a: 139)

この規定は、人民を主役に据え、闘争や労働に対する意識をカンボジアの人民の伝統とし、愛国的革命運動を率いた人物を英雄と位置づけ、三国共闘を通して指導的党であるカンブチア人民革命党の統治へ到った歴史を教えるという宣言である。これらの要領に基づき、順次教科書が作成された。当時の教科書は全て国定教科書で、教育省が一括管理した。ポル・ポト体制下で知識人の多くが殺害されたために、教育を担う人材は圧倒的に不足していた。教科書の執

筆は、ポル・ポト体制以前に学位を取得した者や元教員が担っていたが、教育省に派遣されたベトナム人顧問の影響下に置かれた。ベトナムで使用されている教科書をクメール語訳する場合もあったという⁴。

初等教育用の指導要領の目次（資料①）をみると、小学校1年生から3年生までは、一話完結型の読み物として歴史を扱っていることが分かる。指導要領の目的の通り、歴史教育は植民地主義者や「ポル・ポトとイエン・サリー味」ら民族の独立、自由、幸福の敵を三国共闘により打倒し、カンボジアを復興へと導いた指導的党への恩恵を伝える内容となっている。初等教育の最終学年である4年生になると、通史形式で歴史を学ぶようになる。フランス植民地支配以降の近現代に重点が置かれていることは明白だが、この傾向は資料②に示した中学校用の目次でも同様に言える。これは、近現代史を重視するベトナムの歴史教育の影響を受けた内容と考えられる⁵。

初等教育用の教科書として、『文字の学習』と『数字の学習』がまず作られた。1年生から3年生の歴史科目は『文字の学習』の中に含まれた。一方で、4年生以上の歴史教科書は1980年代初頭の段階では未策定であり、1980年代半ばによく完成した（Kiernan 2004: 81）。まず、1980年代初頭に発行された教科書を概観する。資料収集の制約から、1981年から82年にかけて発行された2年生と3年生の内容を検討する。

2年生の『文字の学習』は全2巻で構成されており、学習指導要領に示された目次規定に沿って書かれている。「私の村の人々」のように目次からは内容が分からないものも多いが、記述分析の結果、次の2つの特徴が見られた。ポル・ポト体制やそれ以前の内戦の被害とその後の復興に関する歴史と、中国人商人を中心とする封建主義者による搾取の歴史であった⁶。ここでは、封建主義者として中国人商人が主に糾弾されている一方で、カンボジアを伝統的に統治してきた封建階級にあたる王族の批判はない。わざわざ「中国人」と名指していることから、当時ポル・ポト派を支援していた中国に対する敵対意識が見て取れる。以上のように2年生の教科書では、ポル・ポト時代を歴史として総括し、中国人を中心とした封建主義者を糾弾する人民史観構築の萌芽が見られた。

3年生の『文字の学習』も2年生同様に全2巻で構成されているが、資料の制約により第1巻のみについて検討を行う⁷。2年生の教科書と比べて、3年生の歴史科目には指導要領の規定で全く言及されていなかった項目も散見される。例えば、「アンコールワット寺院」や「1954

年の独立」がそうである。「アンコールワット寺院」の章では、前半で寺院が建立された時代の繁栄と寺院の文化的価値の高さを称賛すると共に、その時代から現代にかけて封建主義者やシヤム、チャンパーといった近隣の諸勢力に破壊されそうになりつつも生き残ってきたと説明される（教育省 1982: 30-31）。後半では、寺院の建築や装飾など様式の説明をした後、現在では観光の場として重要視されており、「我々賢明な子供たちが、カンボジアの地にアンコール時代を凌ぐ繁栄を懸命に建設する」（教育省 1982: 31-33）と締めくくる。繁栄の時代の象徴としてアンコール時代を位置づける点は従来の歴史観と同様であるが、この繁栄の歴史が歴史教育の中心に置かれた訳ではない。その他の項目に関しては、2年生の教科書同様に、反植民地闘争を中心とした革命運動とポル・ポト体制の被害に重点を置いている⁸。特に、「20世紀末の奴隷社会」の章では人民史観とポル・ポト体制の被害の歴史の融合が見られる。

我々は歴史を通じて、数千年前からカンボジア社会が世界の他の社会と同様に奴隷制を経験してきたことを知っている。しかし、この制度はずっと以前に消え去った。20世紀末までに、世界中の様々な人民が革命を達成し、搾取的体制から解放されているとき、カンボジアの人民は第二の奴隷制の下に置かれた。1975年より権力を奪い取ったポル・ポトとイエーン・サリー味は古代の奴隷制的性格を持つ毛沢東主義を採用した。カンボジアの人民の90%は奴隷となり、10%が村から行政区に至るまで権力を握る奴隷の主人となった。ポル・ポトとイエーン・サリー味は奴隷の主人であり、穏やかで真面目な人民を思いのままに殺す権利を有していた。（教育省 1982: 49-50）

このようなポル・ポト体制の被害を描写する上で、国民の「90%」をポル・ポト体制の被害者と位置づけ、残りの「10%」を加害者と見なし、その中でも特にポル・ポトとイエーン・サリーを最高指導者として名指しした。

新体制が統治の正当性を主張する際に、旧体制を否定的に評価することは広く見られる。特にその変化がラディカルであればあるほど、過去は暗く描かれ、新たに生じた状況を肯定的に語る傾向がある（岡 2011: 2）。また、歴史教育を受ける生徒の中にはポル・ポト体制下で子供兵士として仕えていた者も多くいた。ポル・ポト体制下で許されていた価値観や行為は誤ったものであったと伝え、そのような子供らの価値観を矯正することもまた歴史教育の目的だった

のであろう⁹。以上のようなポル・ポト時代の早急な歴史化は、教育のみならず、文化政策の中にも見られた。

2.2. 文化財保護の規定と博物館事業

宣伝文化省は、1982年に自国の文化財保護に関する包括的指針を発表した。その中で、古代寺院とポル・ポト体制下の被害の痕跡を保存するべき場と定めた。

古代寺院と、ポル・ポトとイエーン・サリによる犯罪現場は、祖国を愛する意識、良い伝統、国民文化、過去の敵に対する怒りを人民が持ち続けるため、良い状態で保存されるべきだ。
(宣伝文化省 1982b: 13)

アンコールワットという世界的に著名な遺跡を抱えるカンボジアが、国家再建の最中、古代寺院に「祖国を愛する意識、良い伝統、国民文化」を伝える場としての役割を与えたこと自体、自然なことである。ただし、これらの古代寺院は、ポル・ポト体制の被害対象としての側面も持ち合わせていた。ポル・ポト体制崩壊の翌年に出された宣伝文化省の報告書では古代寺院の破壊状況に関して、次のように報告された。

ポル・ポトとイエーン・サリの民族虐殺犯罪一味はカンボジアの文化システムの基礎を徹底的に破壊した・・・ポル・ポト、イエーン・サリ、キュー・サンパンはアンコールワット内の多くの仏像を破壊し、第二回廊の南扉を爆破した・・・カンボジア中の多くの寺院が破壊され水路となった。(宣伝文化情報省 1980: 1, 9)

このように生々しい傷跡が残るアンコールワット寺院は、「観光部門の準備は未だ整っていないものの、文化部門の宣伝のために国賓、新聞記者、カメラマン、ライターを案内し、我々の過去の繁栄した文化・文明を示す」(宣伝文化省 1982a: 12)という外交上の役割を担った。その文言を反映するように、多くの外国人が来訪した¹⁰。ただし、アンコール遺跡群は被害対象として維持されたわけではなく、回復されるべき国家の象徴として、少しずつ修復が進められていった¹¹。

以上のようにアンコールワットをはじめとする古代寺院とポル・ポト体制下の被害の痕跡はカンボジアの代表的な文化遺跡となった。この傾向は博物館事業にも見られた。トゥールスラエン犯罪博物館は首都プノンペンの中心部に位置し、ポル・ポト体制下でS-21と呼ばれた政治犯収容所を博物館化したものであった。ここでは数々の拷問と殺害が執り行われ、ポル・ポト体制崩壊直後だけでなく、現在に到っても生々しい傷跡を多く残している。ここは、「民族虐殺がカンボジアで行われたことを忘れず、国民や国際社会に伝えるための場」（宣伝文化情報省 1980: 18）として構想されており、「ポル・ポト体制下で行われた犯罪、虐殺行為を調査、展示公開する場」（宣伝文化省 1982a: 29）であった。一方、国立博物館は、「研究調査、教育、観光のための場であり、古代の遺物を所蔵、展示する場」（宣伝文化省 1982a: 14）と位置づけられた。つまり、ポル・ポト体制の被害に関してはトゥールスラエン犯罪博物館、古代寺院関連は国立博物館というように役割が分けられた。

1979年から1981年にかけてのこれら2つの博物館への入場者数を見ると、表1の通り、トゥールスラエン犯罪博物館への入場者数が圧倒的に多いことが分かる。開館当初の国内入場者の多くは、ポル・ポト体制下で失踪した親類を探すために博物館に展示されている写真を見に来ていた。それと同時に、なぜそのようなことが起こったのかという説明も求めていたという（Ledgerwood 1997: 90）。ポル・ポト体制の虐殺を忘れないという教育の場としてだけでなく、いなくなった家族の手掛かりを求める場でもあった¹²。

表1：1979～81年の入場者数（人）

	国民入場者数	外国人入場者数	総計
トゥールスラエン犯罪博物館	374,157	30,577	404,734
国立博物館	39,638	9,059	48,697

出典：『古代寺院保護、博物館、観光に関する報告書 1981年』

このように国内からの入場者数もさることながら、トゥールスラエン犯罪博物館への外国人の入場者数も看過できない。なぜなら、トゥールスラエン犯罪博物館は「外国人の入場者を意識した博物館」（Ledgerwood 1997: 89）でもあったからだ。文化政策においてもポル・ポト時代を早急に歴史として総括した意味は、ポル・ポト時代に関する負の記憶の定着であろう。それ

は国民のみならず、国際社会にも向けられていた。民族虐殺の記憶を定着する上で、トゥールスラエン犯罪博物館、通称キリング・フィールドと呼ばれる虐殺現場や生々しい傷跡が残る古代遺跡群は、クメール語を解さない外国人に対しても、ポル・ポト体制下の被害を可視的に訴えることができた¹³。

また、そのような負の記憶の定着はプロパガンダの観点からだけではなく、当時の一般大衆の心情からも理解される必要がある。1979年に執り行われたポル・ポト体制下での犯罪を裁く法廷は、国際社会からは「茶番」とみなされ、法廷の有効性を疑問視する声が高まったが、ポル・ポト体制下で傷ついた人々にとって、純粋なカタルシスとしての効果があったと指摘されている (Slocomb 2003: 185)。ポル・ポト時代を歴史化することで、ポル・ポト体制後を「新しい人生」と区切ることは、政権と一般大衆の双方から必要とされていたと考えられる¹⁴。

一方でこの当時、旧王宮博物館と革命博物館の建設も計画されていた。旧王宮博物館に関しては、その名の通り王宮を博物館として一般に公開するもので、「封建時代の王の悪しき慣習を学ぶ場」(宣伝文化省 1982a: 19)として整備が進められた。しかしながら、その位置づけは1981年段階で明確に定まっておらず、「旧王宮博物館」という名前から「近代歴史芸術博物館」へと変更した方がいいのではないかと提言されていた (宣伝文化省 1982a: 21)¹⁵。他方、革命博物館は1981年時点では建設中であり、「階級闘争の歴史の説明や愛国主義的英雄の遺品を保存、展示する場」(宣伝文化省 1982a: 24)として計画されていたようだが、その後完成に到ったかは不明である¹⁶。

1980年代初頭、明確な位置づけが与えられ、国内外の人々に向けて博物館として機能していたのは、ポル・ポト体制下の被害の過去を発信するトゥールスラエン犯罪博物館とアンコール時代の繁栄を象徴するアンコールワット寺院群や古代遺物を所蔵する国立博物館の2館のみであった¹⁷。つまり、古代の栄光と現代の被害に関する歴史や文化の整備が第一に進められたと言える。王制批判や反仏闘争などの革命闘争といった人民史観構築に関わる博物館は、計画されていたものの、その位置づけが不明確、または準備段階にあり、どのような形で人々へ提示するかは定まりきれていなかった。

2.3. 小括

ポル・ポト体制が崩壊し、カンプチア人民共和国が成立して間もない1980年代初頭、ポル・

ポト時代を歴史として総括し、国民が共有すべき共通の歴史経験として、また国際社会へ訴えるべき被害の記憶として位置づける試みが第一になされた。これはプロパガンダという側面だけでなく、ポル・ポト体制下で傷ついた人々の痛みに寄り添い、ポル・ポト体制後を新しい人生の始まりとして区切ることも意味した。その中で「ポル・ポト体制の被害」を国民の共有経験に位置づけた。従来の歴史観で重要視されてきたアンコール時代の歴史は教育の中で重視されなかったが、古代遺跡群や遺物は過去の栄光の復活という文脈で整備・修復が進められ、ポル・ポト時代の被害の痕跡として、可視的に訪問者へ伝える機能も果たした。

3. 通史編纂の試行錯誤

3.1. ロシア語からの翻訳本『カンボジア小史』の頓挫

1985年、ポル・ポト体制崩壊後に書かれた最初の通史『カンボジア小史』が出版された。同書は、1981年にロシア語で出版されたものの翻訳本であった。モスクワで1971年に学位を取得し、ポル・ポト体制崩壊後に教育専門官としてソ連の科学アカデミーからカンボジアへ派遣された言語学者ロン・シャムが訳者であった¹⁸。

『カンボジア小史』は、ソ連の科学アカデミー所属の法学者、歴史学者、地理学者の計5名が執筆者として名を連ねており、インドシナ政治史の専門家であるミヘーヴが編者となっている¹⁹。全4部で構成されており、従来の王中心の歴史叙述ではなく、社会経済を軸とした歴史叙述を目指し、植民地時代以降に比重が置かれた²⁰。

しかしながら、同書は「不正確」という理由によって、教育相パエン・ナヴットによって出版差し止めとなった（Ayres 2000: 134, 219, Kiernan 2004: 81）。ナヴット大臣は、1979年12月よりカンボジア・ソ連友好協会の副会長に就任しており、ソ連との関係も深い（Corfield and Summers 2003: 318）。ソ連で書かれ、ソ連の科学アカデミーから教育専門官としてカンボジアへ赴任していたロン・シャム氏の翻訳書であるにも拘わらず、発行禁止となった理由の詳細は不明である。同書は、1980年代後半になり、再び流通するようになった（Kiernan 2004: 81）。ポスト・アンコール時代のベトナムの侵略やメコン・デルタの失地の歴史など、カンボジア人に想起してほしくない歴史も記されていたために、ベトナム軍やベトナム人顧問の撤退に向けた動きが加速した1987年以降、言論の統制が緩和されるに伴い、再流通したようだが、その経緯も不明である²¹。以上のように、最初の通史編纂は、発行禁止処分によって頓挫した。

3.2. 国定歴史教科書の完成

『カンボジア小史』が発行禁止となった一方、国定歴史教科書の策定は進められた。教科書で書かれるべき通史の概略は、『カンボジア小史』同様に、植民地支配以降に重点が置かれた。1984年11月のナヴット大臣へのインタビューでは、「1985年に中学校、1986年には高校で歴史の授業を開始できるようにしたい」(Vickery 1985: 157)と述べていた。この時点で歴史教科書の執筆が進められていたことは明らかであるが、その教科書が完成したのは、当初の予定より少し遅れて1986年以降のことであった。

これらの執筆を担ったのは、ポル・ポト体制以前に学位を取得した者と歴史や地理の科目を担当した元中等教育の教員たち計5名であった²²。彼らは執筆の際に、草稿をメンバーで相互チェックし、ベトナム人顧問が問題視するような記述がないか確認した後に、ベトナム人顧問のチェックを受けたという²³。これらの作業は、恐怖を伴ったと執筆者は回顧した²⁴。教科書執筆の際に参考資料となったのは、ポル・ポト体制以前にクメール語やフランス語で書かれた歴史書が中心だった。特に1970年から1975年にかけてクメール共和国体制下で数多く出版されたカンボジア史は、ベトナムの侵略や領土の失地をアンコール時代以降の衰退の主要因と挙げた反ベトナム色の強いものであった。また、歴史家を育成し、クメール語で新たな歴史書を執筆できるほど、カンボジアの歴史学界は回復していなかった²⁵。厳しい言論統制下において、カンボジア史を自由に語れる状況でもなかった。カンボジア史に関する語りは、カンプチア救国団結戦線が発行する機関誌『カンプチア』を中心とする国家の統制下に置かれた新聞や雑誌の中でしか見られなかった。その中でも、国内外で著名な社会学者ヴァンディ・カオンが主宰した雑誌『社会科学会報』は他の雑誌と異なり、自由な空気の中で体制に批判的な言論も多少許されていたようだが、カンボジア史、その中でも特にベトナム関係史の描き方で当局から注意勧告を受けることもあった²⁶。教科書の執筆者の中に歴史学の専門的訓練を受けた者も少なく、部分的には雑誌などで示された歴史観を採用できたものの、通史全体の構成を考える上で、現在要求されている歴史観とは異なる資料を用いなければならなかった。そのため、執筆作業に膨大な時間を要したことは想像に難くない。1986年から1987年にかけてようやく小学校用の『歴史5年生』、中学校用の『歴史6年生』、『歴史7年生』、『カンボジア史8年生』が相次いで発行された²⁷。本稿では資料入手の制約より、主に中学校用の教科書を検討する。

教科書に書かれたカンボジア史は、指導要領の規定通り、植民地支配以降の歴史に重点が置かれた²⁸。『歴史 6 年生』は、古代からアンコール王朝の衰退までを範囲とした。『歴史 7 年生』は、ポスト・アンコール時代から 1918 年までを範囲としており、『カンボジア史 8 年生』は、1918 年からカンブチア人民共和国初期の 1980 年代初頭までを範囲とした。1918 年を時代の区切りとする点は、ベトナムの歴史叙述を参考としたと思われる。なぜなら、この時代区分は 1917 年 10 月のロシア革命による阮愛国（ホーチミン）の意識の転換を重視しているからだ²⁹。このようにロシア革命を近現代の時代区分とする歴史観は中国など社会主義国家に共通するが、阮愛国の意識転換を重視している点は、ベトナムを意識した時代区分と言ってよからう。

ここに書かれた通史はアンコール時代を繁栄の時代と位置づけ、それ以後の時代を衰退の時代とする従来のカンボジア史の枠組みを踏襲した。アンコール時代に関する叙述の中で、ジャヤヴァルマン 2 世とジャヤヴァルマン 7 世を民族解放の英雄とし、王国の繁栄を築いた王と位置づけた（教育省 1986: 147, 149）。このように繁栄の時代として肯定的に評価する一方で、封建制が確立し人民が重税に苦しんだ時代として否定的にも描いた（教育省 1986: 163）。これは当時の最高指導者であったヘン・サムリンの歴史観とも一致した³⁰。従来の歴史観で英雄視されていた王についてマルクス主義的人民史観の中でいかに評価するかという問題は、1930 年代のソ連で見られた国民統合と階級闘争史観の両立を目指した国民史構築の動きと類似する³¹。

衰退の歴史に関しては 1979 年までを長い衰退の時代とし、フランス植民地支配以前の衰退はタイによる侵略と、封建階級つまり王族の内紛によるものと評価された。『歴史 7 年生』の最後に掲載された「まとめ」ではそのことが端的に示されている。

衰退の理由は、独裁的で、残酷で、貪欲な心を持ち、権力を握る封建階級による搾取と人民への容赦ない騙しによるものであり、さらに権力を追い求めて互いに殺し合い合った結果である。権力を巡る争いは、外国の封建主義者に有利にはたらき、カンボジアの内政へ干渉するきっかけを与えた。衰退の理由は隣国タイの侵略によるものでもあった。（教育省 1987a: 312-313）

この衰退史観は、歴史教科書が書かれた当時の国内外の状況を明確に反映した。反王制、反タイ、親ベトナムであったカンブチア人民共和国が、衰退の原因を王族の内紛と隣国、その中で

も特にシャムの侵略に力点を置いたことは自然なことだ。一方で、内政干渉した隣国としてタイのみを言及し、ベトナムの影響を完全に無視してポスト・アンコール時代を叙述することも困難であった。『歴史7年生』の本文中ではベトナムによる干渉にも言及するが、干渉の担い手はベトナムの封建主義者に限定されており、ベトナム人民一般とは区別された（教育省 1987a: 225-226）。このように、ベトナムに対する配慮が衰退史観の中にも色濃く出ている。

植民地化以降もカンボジアの衰退と人民の苦しみは続くが、その苦しみに対して人々が闘争を開始した点に言及する。従来の歴史観で見られたフランスに対する肯定的評価は姿を消した³²。

カンボジアがフランスの手中に落ちた日から、カンボジアの人民は気高い勇敢さを持ち、止まることなく闘争に立ち上がり、フランス植民地主義者やカンボジア北西部の肥沃な州を支配するタイ干渉主義者と闘った。植民地主義者や干渉主義者との武装闘争の中で、カンボジアの人民は同志を得た。それはラオスとベトナムの人民であった。（教育省 1987a: 314）

被害者として外部からの助けに頼るのではなく、闘争のために立ち上がる人民像を提示した。これらの闘争はインドシナ三国の人民の共闘の上に成り立つわけだが、当初は「正しい政治指導者や経験が不足していた」（教育省 1987a: 314）ため、困難を極めたという。ここで転機をもたらしたのが、既述の通り、阮愛国の意識の転換であった。

このように被害者として一方的に虐げられる人民像ではなく、革命へ前進する人民を描いていく。この闘争は二つの闘争に分けられた。

第一に、民族独立、民主主義、社会主義のために、カンボジアの人民と敵である帝国主義者、新旧植民地主義者、封建主義者、様々な反動主義勢力との闘争である。

第二に、党内の闘争である。純粋な共産主義者と民族を裏切った日和見主義者であるボル・ポト、イエン・サリ、キュー・サンパンとの闘争である。フランスとアメリカの帝国主義が敗北した後、我々カンボジアはボル・ポト、イエン・サリ、キュー・サンパンの民族虐殺犯罪者集団の支配下に入った。1979年1月7日にカンボジアの人民は永久に解放された。（教育省 1987b: 194-195）

第一の闘争は、フランス植民地主義勢力にはじまり、第2次世界大戦下の「日本帝国主義」、独立後の「封建的で反動的性格を持つ」シハヌーク、そして「アメリカ帝国主義」と1970年のクーデタ後に成立したロン・ノル「傀儡政権」に対するものであった（教育省 1987b）。これらの闘争を経て社会主義革命へ到るはずであったが、第二の闘争に示された通り、ポル・ポトらの「裏切り」によって、人民は再び闘争せねばならなくなった。カンボジアの革命の歴史が他の地域と異なる点はここにある。

この第二の闘争こそが、1980年代初頭の自国史の再編の中で最初に着手されたポル・ポト時代の歴史評価に関わる。革命の結果、人民に幸福がもたらされるはずが、歴史上で最大の被害を受けたとして、「国全土で人民は未曾有のテロ、殺人、野蛮さを目の当たりにした。このような光景は、中世以降の歴史の中で過度に最悪のものであった」（教育省 1987b: 161）という評価によって通史の中に組み込まれた。その中でカンボジア国民全体を被害者として、「カンボジアの中で300万人の従順なカンボジア人民が殺され、民族虐殺政治から被害を受けなかった家族はいなかった」（教育省 1987b: 179）と総括された。このような被害意識は、2001年に発行された歴史教科書の中でも明確に継承された（教育青年スポーツ省 2001: 35）。

被害の経験は、ベトナムの人民と共有されるものとしても位置づけられた。「ベトナム領でベトナムに対して侵略すると共に、国内で奴ら（著者注：ポル・ポト派）はテロを起こし、ベトナム人を大虐殺した」（教育省 1987b: 158）と説明され、ベトナムの人民をポル・ポト体制の虐殺の被害を共有する者と位置づけた。このような被害の共有という観点は、1978年末から1979年初頭にかけて、カンブチア人民共和国を率いることになる指導者らがベトナム兵と共に進軍し、ポル・ポト体制を打倒したという説明を、「ベトナムによる侵攻」と認識されないようにしようという意図も含まれていたと考えられる。

このように、被害の歴史の中で打倒しなければならない敵として、外国勢力のみならず、シハヌーク、ロン・ノル、ポル・ポトらカンボジア人勢力も位置づけたことは、当時の国際的状況を鑑みれば、重要なことであった。現在闘っている敵が歴史的にもカンボジアを破壊してきた勢力であるという説明は、現在の闘争を肯定することができた。ただし、このような自国史は国民の分断を促す可能性があることから、シハヌークやポル・ポトら特定の指導者のみを非難し、それに付随した勢力は名指ししなかった³³。カンボジアは多民族国家というよりも、クメ

ール人を中心とする単一民族国家として認識されており（北川 2006: 54-55）、自国史を構築する上で、国民統合が論点になることは少ない。しかし、前体制を否定する形で体制が幾度に渡って代わり、その諸勢力が駆逐されることなく次体制で抵抗勢力として台頭し続けたという歴史的経緯から、政治志向による国民の分断を経験してきた。この分断を乗り越え、カンプチア人民共和国の国民としてまとめることもこの時代の自国史再編の課題であった。

3.3. 小括

1980年代前半からはじまった通史編纂の動きは、試行錯誤の末、1980年代中葉に完成した。1985年にソ連で出版された『カンボジア小史』の翻訳本が発行されるも、すぐに発行禁止処分となり、最初の通史出版は頓挫した。その最中、国定歴史教科書の執筆を通して通史の編纂が行われた。国定歴史教科書は、ベトナム人顧問による検閲下に置かれ、執筆陣は「恐怖」を感じつつ、制約された資料を用いて執筆した。

そのようにして完成した通史は、人民史観の形式をとるものの、アンコール時代を繁栄の時代と描き、それ以降を衰退の時代と見なす従来の歴史枠組みを踏襲した。ただし、従来手放しに称賛されてきたアンコール時代については、繁栄の時代として言及されつつも、反封建主義という立場からその統治は批判的にも捉えられた。人民闘争は2つに分けられ、他地域でも見られた帝国主義者や封建主義者らとの闘争の他に、ポル・ポトら国内の社会主義勢力とも闘争せねばならなかったと総括した。このような闘争の歴史のうち、特に現代史は国民の政治的分断を避け、カンボジアの現在の状況を歴史的に肯定する点も意識された。

4. おわりに

カンプチア人民共和国期の自国史編纂は、荒廃した国土の誇りを復活させ、ポル・ポト時代の被害の記憶を国民が共有するべき歴史として早急に総括することから始まった。教科書の中で人民史観の萌芽が見られたが、それが通史として登場するには1980年代中葉まで待たねばならなかった。ベトナムという他国の干渉下に置かれ、人民史観に沿った自国史の再編に取り組みねばならなかったカンボジアでは、従来の歴史観の見直しが迫られた。カンボジア史を栄光と衰退の歴史として描く従来の枠組みは継承したものの、アンコール時代は人民史観の観点から手放しに称賛されることなく、その封建的性格は批判された。歴史観の軸である闘争の歴史

は、他国同様に封建主義者や帝国主義者に対するものと、カンボジアに独自の特徴としてポル・ポトラとの闘争という、社会主義勢力同士によるものという2つの闘争で構成された。このポル・ポトラとの闘争こそ、自国史再編の最初に取り組みられた歴史であり、ポル・ポト時代は歴史上最も甚大な被害を国土へ与えたという歴史評価と共に通史へ挿入された。このような闘争の歴史は、特に現代史叙述を通して、進行中の内戦における人民共和国政府の立場を正当化するものであった。一方で、内戦による国民の政治的分断を回避するため、人民を苦しめた過去の体制の責任を一部の指導者へ負わせた。その最たるものがポル・ポト時代の描写であり、虐殺の責任をポル・ポト、イエン・サリ、キュー・サンパンの3名の指導者へ負わせ、他の人民は総じてポル・ポト体制の被害者と位置づけられた。

通史が完成した直後、カンボジアの国内外の環境は大きく変化した。ベトナム人顧問の撤退は、1989年に完了した。人民革命党は1991年に共産主義を放棄し、党名を人民党へ改称した。翌年には党の歴史認識を大きく転換し、ベトナムとの共闘の過去はその語りの中から姿を消した。1993年にカンボジアが王国へ復帰するとすぐに自国史の再編が開始された。人民史観は姿を消し、王族を否定的に語ることもなくなった。1991年のパリ和平の結果、人民党はこれまで対決していた諸勢力と共に国家運営をしなければならず、特に独立以降の現代史を巡る歴史教育に頭を悩ませることになる（新谷 2013）。1980年代に構築された自国史全体が教育や文化政策の中で伝えられた期間は短かったが、そこで構築された歴史観のうち、特にポル・ポト時代をめぐる歴史観は、体制の責任の所在に関する評価や語り方が変化したものの、その時代の被害は国民全体で共有できるものであるという意識は継承されていったのである。

資料①：初等教育の歴史科目の目次

1年生
1. 祖国カンボジア 2. 新しい革命時代の子供の生活 3. 新しい革命時代の学校 4. 祖国を愛する 5. スヴァイリエンの水田の田起こし機 6. キエンスヴァイの農業活動 7. プノンパンの歴史 8. ベトナムの兄戦士

2年生
1. ツールスラエン収容所 2. ゴム畑 3. 胡椒畑 4. 漁業 5. 前線の兵士 6. 驚くべき10月革命 7. カンボジア王国からカンプチア人民共和国へ 8. 民族虐殺体制への抵抗闘争 9. 勝利の日の後の喜び 10. 私の村のお寺 11. 私の村の人々 12. カンボジアとベトナムの友好 13. カンボジアの人民の闘争の伝統 14. パイリンの歴史
3年生
1. 英雄ポーコムバオ 2. 団結闘争の不変 3. 封建階級の影響を打破する 4. 団結闘争の勝利 5. 20世紀末の奴隷社会 6. 1975～79年のカンボジア 7. 1863～1975年のカンボジア 8. 民主カンプチア 9. 北京指導部の毒思想 10. ベトナム人民の闘争と建設の34年 11. 英雄アチャー・スヴァー 12. 英雄アチャー・ハエム・チアウ 13. 植民地体制への耐久闘争運動 14. ベトナム社会主義共和国の思想 15. 人民の師 16. 強く優秀な人民 17. もう一つの新しい勝利 18. 私は考える 19. 9月 20. 革命労働者 21. 勇敢な戦士 22. 少人数でも敵を捕まえられる 23. 革命へ参加する 24. 新しい漁業 25. 最初の学習年 26. 批判的に考える
4年生
1. 祖国カンボジア 2. 祖国カンボジア(続) 3. プノム王国(1～6世紀) 4. カンプチア・ロアト時代(550～802年) 5. モハー・ノーコー時代(9～14世紀) 6. モハー・ノーコー時代以降(1430～1863年) 7. フランス植民地支配下のカンボジア(1863～1954年) 8. 植民地主義に対する人民の闘争運動(1863～1918年) 9. 植民地主義に対する人民の闘争運動(続)(1918～39年) 10. フランス植民地拡張主義と日本軍国主義との闘争運動(1939～45年) 11. フランス植民地主義との戦争とアメリカの干渉(1945～50年) 12. フランス植民地主義との戦争とアメリカの干渉(続)(1950～54年) 13. 独立、平和、中立の時代のカンボジア(1954～1970年) 14. 抗米救国戦争(1970～73年) 15. 抗米救国戦争(続)(1973～75年) 16. ポル・ポトとイエン・サリー味の体制下でのカンボジア(1975～79年) 17. ポル・ポトとイエン・サリー味に対する闘争運動(1975～79年) 18. まとめ

出典：『初等教育のための公教育要領』

資料②：中学校の歴史科目の目次

5年生
<p>1. 初期文化とカンブチア・ロアトの形成</p> <p>1.1. カンボジア先史時代（2時間） 1.2. メコン川下流域プノム王国の文化（2時間） 1.3. カンブチア・ロアト時代（1時間）</p> <p>2. カンボジアの階級制度の進歩</p> <p>2.1. アンコール時代：ジャヤヴァルマン2世、ヤショーヴァルマン1世、スーリヤヴァルマン2世からジャヤヴァルマン7世まで（2時間） 2.2. カンボジア階級の性質：社会システムと政治構造（2時間） 2.3. アンコール時代の経済と社会（1時間） 2.4. アンコール時代の文化（1時間）</p> <p>3. まとめ（1時間）</p>
6年生
<p>1. タイの侵略に対するカンボジア人民の闘争：1352～1430年（3時間）</p> <p>2. タイの侵略に対するカンボジア人民の闘争：1431～1525年（2時間）</p> <p>3. タイの侵略に対するカンボジア人民の闘争：ロヴェーク時代（3時間）</p> <p>4. カンボジアの階級関係—ベトナムとタイ：ウドン時代：1620～1863年（3時間）</p> <p>5. フランス植民地主義勢力の侵略下のカンボジア（3時間）</p> <p>6. カンボジア人民の闘争（19世紀半ば）（3時間）</p> <p>7. フランス植民地主義勢力の拡大（3時間）</p> <p>8. カンボジア人民の闘争（19世紀末）（2時間）</p> <p>9. カンボジア：1900～18年（2時間）</p> <p>10. まとめ（2時間）</p>
7年生
<p>1. 世界大戦中のカンボジア：1919～39年（4時間）</p> <p>1.1. フランス植民地主義勢力の圧政 1.2. 人民の生活とフランス植民地主義勢力への闘争：人民運動と徴税への抵抗 1.3. カンボジア社会とインドシナ共産党による影響</p>

2. 第2次世界大戦時代のカンボジア：1939～45年（5時間）
 - 2.1. フランス植民地主義勢力による秘密の策略と騙しの手法
 - 2.2. 日本勢力下のシハヌークとソン・ゴク・タンによる人民主義政治
 - 2.3. アチャー・ハエム・チアウの蜂起
3. フランス植民地主義勢力との闘争：1945～54年（5時間）
 - 3.1. 第1段階（1945～50年）：フランス植民地主義勢力の手段と反動的な農村階級、闘争運動の開始
 - 3.2. 第2段階（1950～54年）：ソン・ゴク・ミンのイサラク戦線と政治、インドシナ諸国の遠回りな連帯：軍事、政治部門の勝利、人民独立問題の中でのシハヌーク王の活動—ジュネーブ協定
4. 平和・中立政治時代のカンボジア：1954～70年（5時間）
 - 4.1. 歴史の交錯点：中国帝国主義勢力の様々な策略、時代の影響、ベトナムの革命。シハヌークによる「平和の島」政治
 - 4.2. カンボジアの平和・中立政治：1945～55年のアメリカ合衆国寄りの政治。1956～66年の肯定政治、1966～70年の迷走政治
5. カンボジア人民によるアメリカ帝国主義との戦争：1970～75年（2時間）
6. 革命の裏切り：ボル・ポトとイエン・サリの民族虐殺裏切り体制下のカンボジア：1975～79年（2時間）
7. カンボジアの人民の時代（2時間）
8. まとめ（2時間）

出典：『第2課程と第3課程のための学習指導要領』

¹ 本稿は、東南アジア学会春季大会（於愛媛大学、2015年5月30日）における個人報告「自国史の再編—ボル・ポト体制後の『カンボジア史』構築」を加筆、修正をしたものである。大会では有益なコメントを頂いた。また、本稿の査読者の方から丁寧なコメントを頂いた。この場を借りて御礼を申し上げる。本研究は日本学術振興会特別研究員奨励費（課題番号：258706）の助成による成果の一部である。

² ただし、フランス植民地時代に構築された歴史観が全面的に継承されたわけではなく、当時の指導者であったシハヌークの都合の良いように継承されたという（笹川 2006: 207）。

³ 独立以降の歴史叙述の特徴を論じたキアナンは、カンブチア人民共和国期の歴史編纂からはベトナムの歴史観と反する歴史観が排除されたと指摘する（Kiernan 2004: 81）。

⁴ ボル・ポト体制崩壊後の教科書執筆プログラムセンターには、77人のカンボジア人と7人のベトナム人

顧問が在籍していた。1980年2月に初等教育用の教科書39冊が発行された (Ayres 2000: 133)。

⁵ 当時のベトナムの歴史教育については、高校用の教科書のうち、ベトナム史の部分を翻訳し解説したベトナム社会主義共和国教育省編、吉沢南・古田元夫編訳『世界の教科書——ベトナム I』と『世界の教科書——ベトナム II』を参照されたい。

⁶ 封建主義者や中国人に搾取された歴史は、「ゴム畑」「胡椒畑」「漁業」「私の村の人々」といった商業の章の中で書かれた。

⁷ 第1巻の歴史科目は、「アンコールワット寺院」「英雄ポーコムバオ」「団結闘争の不变」「団結闘争の勝利」「20世紀末の奴隷社会」「偽の民主カンブチア」「北京指導部の毒思想」「ベトナム人民の闘争と建設の34年」「英雄アチャー・スヴァー」「英雄アチャー・ハエム・チアウ」「植民地体制への耐久闘争運動」「1954年の独立」「封建階級の衰退」で構成された。

⁸ 歴史科目に該当する全13章分中、ボル・ポト体制の被害と抵抗運動に関する内容が5章分、反植民地闘争に関する内容が5章分で、残りは「アンコールワット寺院」「封建階級の衰退」「ベトナム人民の闘争と建設の34年」であった。反仏闘争に関してはアチャー・スヴァー、ポーコムバオ、アチャー・ハエム・チアウといった植民地時代の反仏英雄に焦点を当てた内容であった。

⁹ 2013年8月と2014年8月にカンボット州オンコーチェイ郡で実施した聞き取り調査でも、当時の教育の課題はボル・ポト体制下で子供が獲得した価値観を転換させることであったという。同調査は、南山大学の野口博史氏のご厚意で実施できた。ここに御礼を申し上げる。

¹⁰ 1981年の入場者数は、国内からの20,211人に対して、国外からは4,211人であった。

¹¹ 1981年にアンコールワットの修復事業のために3か月の訓練コースを設置するにあたり、非社会主義国のインドと協定を締結した。1984年には、当時の首相チャン・シーがアンコール寺院群の修復と維持のために特別委員会を設置した (Slocomb 2003: 184)。

¹² 国民に対するボル・ポト体制の記憶の維持はその後も加速し、5月20日を「嫌悪の日」として、ボル・ポト時代の虐殺を思い出す日が1984年に制度化された。

¹³ このことは、1979年に作成された外国人来訪者用にフランス語で作成された冊子『カンブチア人民共和国』(Sophon 1979)でボル・ポト体制の被害に関する写真のページが全体の約3分の1を占めていることから明らかである。同資料は古田元夫氏より提供いただいた。ここに御礼を申し上げる。

¹⁴ 「新しい人生」は1979年1月7日以降を象徴する標語として頻繁に登場する。1979年初頭より刊行を開始したカンブチア救国団結戦線の機関紙『カンブチア』の中でも、1979年第13号より数回にわたって「新しい人生の建設」が特集として組まれた。

¹⁵ その理由は、博物館の展示の目的を達成するために必要な展示ができておらず、芸術作品や19世紀末から20世紀初頭にかけての歴史作品を集めて展示した方がいいのではないかと考えられたためである (宣伝文化省 1982a: 21)。

¹⁶ 現国立博物館館長コン・ヴィレアック氏へのインタビュー調査でも、1980年代に革命博物館がプノンペンに存在したか記憶していないという。2015年4月に実施。

¹⁷ 外国人用のパンフレット『カンブチア人民共和国』でも、外国人が視察する歴史的場所として、アンコールワットとトゥールスラエン犯罪博物館が紹介されている。その写真と共に、次のような解説が付けられた。「約4年間、外の世界に扉を閉じていた後、首都プノンペンはボル・ポト民族虐殺政権に勝利し、再び開いた。50人以上のジャーナリストが復活したアンコールの地を訪れた。」(Sophon 1979: 96)。

¹⁸ ロン・シャム氏の経歴に関しては、anonymous (2007) を参照した。

¹⁹ ミヘーヴは『カンボジア小史 (История Кампучии : краткий очерк)』の他にも『ラオス史 (Революция в Лаосе : некоторые основные уроки и главные задачи)』(1980年)、『On the side of a just cause; Soviet assistance to the heroic Vietnamese people』(1970年)、『国際法 (Международная правосубъектность БССР)』(1967年)などを執筆するインドシナ政治史の専門家である。

²⁰ 第1部は、カンボジアの古代史からフランスによって植民地化されるまでを扱っており、243ページから成る。第2部は19世紀半ばから第2次世界大戦までのフランス植民地時代と日本占領時代を扱っており、101ページである。第3部は、第2次世界大戦終結から王政が打倒された1970年のクーデタまでを扱っており、118ページである。第4部は1970年からクメール語版が出版される直前の1984年までを扱っており、95ページである。

²¹ 王立ブノンベン大学史学科のマン・ソティ氏(仮名)は、1987年段階で、コンボンチャム州コンボンシヤム郡教育局に同書が保管されていたと記憶している。2015年8月にインタビュー調査実施。

²² 歴史教科書執筆に関しては、当時の執筆者の一人S氏へマン・ソティ氏の仲介を介して電話インタビュー調査を2014年9月に実施した。この当時の執筆者らは、1990年代以降は歴史教科書の執筆には関わっておらず、政府顧問、省庁長官、州知事など、政府要職に就いている。

²³ 教科書の記述内容をどのように検閲したのか、ベトナム人顧問がクメール語を読めたのか、又は通訳が翻訳したのか定かではない。この点は引き続きの調査を要する。

²⁴ 執筆者のS氏は、「歴史教科書は誰も書きたがらなかった。ベトナム人顧問の意に沿って書けるか心配しながら執筆した」という。ベトナム人顧問に対して恐れを感じていたかという点に関しては、教育省内でも様々な見解が存在している。1980年代の言語教育を研究したクレイトンのインタビュー調査では、「大臣や局長らはベトナム人顧問に対して恐れを感じていた」と述べる者がいる一方で、「教育省は他の省庁と比べてベトナム人顧問に強制されることはなかった」と述べる者もいたという(Clayton 1999: 349-350)。

²⁵ 1980年に高等師範学校の中に史学科が開設され、歴史の専門教育が開始された。1984年より史学科に在籍したシウ・トゥオン氏によると、当時は3年制で、1学年40名ほど在籍していた。卒業生の多くは小中学校の教員や士官学校の教員となり、大学へ残る者は僅かであったという。2015年5月にインタビュー調査実施。

²⁶ 当時ヴァンディ・カオンと共に、『社会科学会報』を執筆していたトン・セライ氏へのインタビュー調査より。2015年3月実施。

²⁷ 1986年より、学年制が変更された。初等教育が1年延び、5年制となった。これらの教科書が実際の教育現場で使用されたかは不明である。当時中学生であったマン・ソティ氏によると、歴史の授業を受けたことはないという。歴史を教えらるる教員が少なく、さらにその教員たちも歴史を教えたがらなかったという。2014年8月にインタビュー調査実施。

²⁸ フランス植民地支配以前が119ページであるに対して、植民地支配以降が264ページとなっており、植民地支配以降に重点が置かれている。

²⁹ 「ロシアの10月社会主義革命以降、阮愛国は愛国思想からレーニン主義へと向かった。この変化やイデオロギーの変化、阮愛国という導師の闘争方針が、闘争とインドシナ三国の人民の未来にとって最も重要な歴史的出来事となった。」(教育省 1987a: 315)

³⁰ 「アンコール建設はカンボジアの労働者、知識人、芸術家の天賦の才能の明確な証拠であり、驚くべき珠玉の力である。しかし同時に強制労働を人民に課し、苦痛を与え、数世紀にわたる大災害へと国民を陥れることとなった。」(ヘン 1984: 3-4)

³¹ 「1930年代以降のソ連における国民的アイデンティティ模索の中で、全国民が共有し得る歴史像と階級意識をいかに両立させるかという問題が歴史家の論点となった。イワン雷帝やピョートル1世らロシア君主については、国家の統合・強化への貢献を肯定的に評価し、階級的支配は否定的に捉えるという描写が定着した。」(立石 2011: 289)

³² ポル・ポト体制以前に編まれた代表的なカンボジア史は、全2巻で構成されるトラン・ギアの『クメール史』である。第2巻のフランス植民地時代の評価の中で、反仏抵抗運動に関しては個別に言及するにとどまり、シヤムやベトナムからカンボジアの領土を守ったという点で肯定的に評価された(トラン 1974: 191)。

³³ 三派連合側の兵士に対する投降戦略では、一部の指導者を除き、我々カンボジア国民の一員であるという宣伝が行われた。1984年の大臣評議会では「ポル・ポト、イエン・サリ、キュー・サンバン、ソン・サン、シハヌークの武装勢力の兵士のほとんどは、我々カンボジア市民の夫であり、子供であり、若き兄弟である」と報告された(Gottesman 2004: 225)。

参考文献

- anonymus. ២០០៧. *ជីវប្រវត្តិកងកម្ពុជាសង្គ្រាមប្រយុទ្ធនឹងសៀម, ភ្នំពេញ: វិទ្យាស្ថានភាសា*. (anonymus. 2007. 『ロン・シヤム教授閣下の人生』 プノンペン: 国語研究所.)
- ក្រសួងយោសនាការ, វប្បធម៌ និង ព័ត៌មាន. ១៩៨០. *របាយការណ៍ អភិរក្សប្រាសាទបុរាណសារមន្ទីរនិង ទេសចរណ៍ ១៩៧៩-១៩៨០*. (宣伝文化情報省. 1980. 『古代寺院保護、博物館、観光に関する報告書 1979-1980年』.)
- ក្រសួងយោសនាការ និងវប្បធម៌. ១៩៨២ក. *របាយការណ៍ អភិរក្សប្រាសាទបុរាណសារមន្ទីរនិងទេសចរណ៍ ១៩៨១*. (宣伝文化省. 1982a. 『古代寺院保護、博物館、観光に関する報告書 1981年』.)
- . ១៩៨២ខ. *របាយការណ៍សកម្មភាពការងាររបស់ក្រសួងយោសនាការវប្បធម៌ព័ត៌មានក្នុងឆ្នាំ១៩៨១*. (———. 1982b. 『宣伝文化情報省の1981年の活動報告書』.)
- ក្រសួងអប់រំ. ១៩៨០. *កម្មវិធីសំរាប់កំរិតសិក្សាទី២និងកំរិតសិក្សាទី៣*. (教育省. 1980. 『第2課程と第3課程のための学習指導要領』.)
- . ១៩៨១ក. *កម្មវិធីបឋមសិក្សាវិជ្ជាទូទៅ, ហ្វេមីមិញ: គ្រឹស្ថានបោះពុម្ពផ្សាយអប់រំ*. (———. 1981a. 『初等教育のための公教育要領』 ホーチミン: 教育印刷配布局.)
- . ១៩៨១ខ. *រៀនអក្សរ ថ្នាក់ទី២ភាគ១, ហ្វេមីមិញ: គ្រឹស្ថានបោះពុម្ពផ្សាយអប់រំ*. (———. 1981b. 『文字の学習 2年生第1巻』 ホーチミン: 教育印刷配布局.)
- . ១៩៨១គ. *រៀនអក្សរ ថ្នាក់ទី២ភាគ២, ហ្វេមីមិញ: គ្រឹស្ថានបោះពុម្ពផ្សាយអប់រំ*. (———. 1981c. 『文字の学習 2年生第2巻』 ホーチミン: 教育印刷配布局.)

- . ១៩៨២. *រៀនអក្សរ ថ្នាក់ទី៣ភាគ១*, ហ្វីមីញ: ត្រីស្ថានបោះពុម្ពផ្សាយអប់រំ. (——. 1982. 『文字の学習 3年生第1巻』 ホーチミン: 教育印刷配布局.)
- . ១៩៨៦. *ប្រវត្តិវិទ្យាថ្នាក់ទី៦*, ហ្វីមីញ: ត្រីស្ថានបោះពុម្ពផ្សាយអប់រំ. (——. 1986. 『歴史 6年生』 ホーチミン: 教育印刷配布局.)
- . ១៩៨៧ក. *ប្រវត្តិវិទ្យាថ្នាក់ទី៧*, ហ្វីមីញ: ត្រីស្ថានបោះពុម្ពផ្សាយអប់រំ. (——. 1987a. 『歴史 7年生』 ホーチミン: 教育印刷配布局.)
- . ១៩៨៧ខ. *ប្រវត្តិវិទ្យាកម្ពុជា ថ្នាក់ទី៨*, ហ្វីមីញ: ត្រីស្ថានបោះពុម្ពផ្សាយអប់រំ. (——. 1987b. 『カンボジア史 8年生』 ホーチミン: 教育印刷配布局.)
- ក្រសួងអប់រំ យុវជន និង កីឡា. ២០០១. *សិក្សាសង្គម ប្រវត្តិសាស្ត្រ កម្ពុជា ថ្នាក់ទី១២*, ភ្នំពេញ: ត្រីស្ថានបោះពុម្ពផ្សាយ. (教育青年スポーツ省. 2001. 『社会科——カンボジア史 12年生』 プノンペン: 印刷配布局.)
- ត្រឹង ងា. ១៩៧៤. *ប្រវត្តិសាស្ត្រខ្មែរ ភាគ២*, ភ្នំពេញ. (トラン・ギア. 1974. 『クメール史第2巻』 プノンペン.)
- មីហេយេវ. យ.យ. ១៩៨៥. *ប្រវត្តិសាស្ត្រសង្ខេបនៃប្រទេសកម្ពុជា*, ម៉ូស្កូ: ប្រូហ្គស្ស៊ី. (Y. Y. ミヘーヴ. 1985. 『カンボジア小史』 モスクワ: プロカス.)
- ហេង សំរិន. ១៩៨៤. *សុន្ទរកថារបស់សមមិត្តប្រធានហេងសំរិន ថ្លែងក្នុងអង្គមិទ្ធិញ្ញខួបអនុស្សាវរីយ៍លើកទី៥ ទិវាបុណ្យជាតិនៃសាធារណរដ្ឋប្រជាមានិតកម្ពុជា*, ភ្នំពេញ: គណៈយោសនាអប់រំមជ្ឈិម. (ヘン・サムリン. 1984. 『カンプチア人民共和国の国民の祝日第5回祝賀友好会におけるヘン・サムリン代表同志の演説』 プノンペン: 中央宣伝教育委員会.)
- 天川直子. 2001. 「カンボジアにおける国民国家形成と国家の担い手をめぐる紛争」 天川直子編 『カンボジアの復興・開発』 アジア経済研究所, p.21-65.
- 岡洋樹編. 2011. 『歴史の再定義——旧ソ連圏アジア諸国における歴史認識と学術・教育』 東北大学東北アジア研究センター.
- 北川香子. 2006. 『カンボジア史再考』 連合出版.
- 笹川秀夫. 2006. 『アンコールの近代——植民地カンボジアにおける文化と政治』 中央公論新社.
- 新谷春乃. 2013. 「カンボジア国家の現代史認識——カンプチア人民共和国成立以降のカンボジア国定歴史教科書の変遷」 修士論文 (学術研究, 東京大学) .
- 立石洋子. 2011. 『国民統合と歴史学——スターリン期ソ連における『国民史』論争』 学術出版

会.

- ベトナム社会主義共和国教育省編. 吉沢南・古田元夫編訳. 1985a. 『世界の教科書——ベトナム I』ほるぷ出版.
- . 1985b. 『世界の教科書——ベトナム II』ほるぷ出版.
- 山田裕史. 2011. 「ボル・ポト政権後のカンボジアにおける国家建設——人民党支配体制の確立と変容」博士学位論文（地域研究, 上智大学）.
- Ayres, David. 2000. *Anatomy of a Crisis; Education, Development and the State in Cambodia, 1953-1998*, Chiang Mai: Silkworm Books.
- Barnet, Anthony. 1990. “Cambodia Will Never Disappear,” *New Left Review*, 180: 101-125.
- Clayton, Thomas. 1999. “Cambodians and the occupation: responses to and perceptions of the Vietnamese occupation, 1979-89,” *South East Asia Research*, 7 (3): 341-363.
- . 2000. *Education and the Politics of Language: Hegemony and Pragmatism in Cambodia, 1979-1989*, Hong Kong: Comparative Education Research Center.
- Corfield, Justin and Laura Summers. 2003. *Historical Dictionary of Cambodia*, Maryland: Scarecrow Press.
- Edwards, Penny. 1996. “Imaging the Other in Cambodian Nationalist Discourse before and during the UNTAC period,” *Propaganda, Politics, and Violence in Cambodia: Democratic Transition under United Nations Peace-Keeping*, Steve Heder and Judy Ledgerwood (eds), 50-72. New York and London: M.E. Sharpe.
- . 2007. *Cambodge: The cultivation of a Nation, 1860-1945*, Chiang Mai: Silkworm Books.
- Evans, Richard J. 2003. “Redesigning the Past: History in Political Transitions,” *Journal of Contemporary History*, 38 (1): 5-12.
- Frings, Vivian. 1997. “Rewriting Cambodian History to ‘Adapt’ it to a New Political Context: The Kampuchean People’s Revolutionary Party’s Historiography,” *Modern Asian Studies*, 31(4): 807-846.
- Gottesman, Evan. 2004. *Cambodia after Khmer Rouge: Inside the Politics of Nation Building*, Chiang Mai: Silkworm Books.
- Kiernan, Ben. 2004. “Recovering History and Justice in Cambodia,” *Comparativ*, 14: 76-85.

- Ledgerwood, Judy. 1997. "The Cambodian Tuol Sleng Museum of Genocidal Crimes: National Narrative," *Museum Anthropology*, 21(1): 82-98.
- Slocomb, Margaret. 2003. *The People's Republic of Kampuchea 1979-1989; The Revolution after Pol Pot*, Chiang Mai: Silkworm Books.
- Sophon, Chey. 1979. *République Populaire du Kampuchéa*, Phnom Penh: SPK.
- Vickery, Michael. 1986. *Kampuchea; Politics, Economics and Society*, London: Frances Printer.

Rewriting National History Examining the History of Cambodia Written under the People's Republic of Kampuchea Regime

Haruno SHINTANI

This article examines how the People's Republic of Kampuchea regime (PRK, 1979–89) attempted to design a new history of Cambodia. In particular, it focuses on the following points: the rehabilitation of the country's historical pride, problems stemming from remembering its traumatic past, national unity under the civil war, transition to historiography based on materialism, and censorship by Vietnamese advisors.

Rewriting of national history under the PRK regime commenced from the rehabilitation of historical pride and historicization of the Pol Pot regime's genocide as a traumatic memory through history textbooks and cultural policies. The comprehensive history based on materialism had not been written until the mid-1980s, and it was done under censorship by Vietnamese advisors. The authors should change the previous historiography. The new history had the same essence as the previous one: the history of Cambodia glorified the Angkor period and lamented the decline of the post-Angkor period. However, the Angkor period was not only praised for its prosperity and national unity but also criticized for its feudalistic nature. The history of struggle was divided in two stages: the struggles against feudalism and imperialism, and those against the Pol Pot–Ieng Sary clique. The former is similar to the historiography of other socialist countries, and the latter is typical in Cambodia. This historiography showed the legitimacy of the undergoing civil war, particularly in terms of modern history. To avoid political division among people, the responsibility for suffering was imposed only on a few political leaders. In particular, the responsibility of genocide under the Pol Pot regime was imposed only on three leaders: Pol Pot, Ieng Sary, and Khieu Samphan. It placed all other people as victims of the Pol Pot regime, whose historical view would be kept even if there were some historiographical change under the next Cambodian regime.